

秀賞

手がかりと手ごたえ
宮城県仙台市立八木山中学校
3年 小林 直大

吹奏楽部の部員にとって、夏のコンクールは命よりも大切だ。大げさと思うかもしれないが、吹奏楽部員として命がけであることは間違いない。引退を間近に控えた僕ら中学3年生ともなればなおさらのこと。コンクールで良い結果を出したいという願いと、それに伴う不安は並大抵のものではない。

僕も不安だった。一つの課題が改善できたと思えばまた別の課題が出てくる終わりのない練習、少しの怠りが大きな遅れとなる積み重なるプレッシャー、そして僕自身の技術不足のための自己嫌悪と無力感。自分の弱さに毎日毎日心が痛んだ。

そんな状態で挑むことになった今年のコンクール。自由曲に選んだ「ピョートルの悲劇」は、チャイコフスキーの生涯をモチーフにした作品だ。

ピョートル・チャイコフスキー。「くるみ割り人形」などで知られるロシアの偉大な作曲家。クラシック音楽をあまり聴かない僕は、その程度の知識しかもっていなかった。何か演奏に生かせる手がかりを見つけようと、市の図書館に行って調べてみることにした。カウンターから抱えるようにして借りたのは、チャイコフスキーに関する伝記や分厚い専門書など5、6冊。これを読めば、何か手がかりを見つけることができるかもしれない。読みやすそうな薄い本から開き、気になるところにしおりを挟みながら読み進めてみると、そこに書かれているのは僕の想像とは全く違う彼の姿だった。

チャイコフスキーは、人一倍神経質で感傷的性格で、彼の家庭教師がつけたあだ名は「ガラスの坊や」。幼少期に最愛の母を亡くし、音楽家として大成した後も、自身が同性愛者であることによる社会的偏見や、心配性で物事を悲観する自身の性格などに苦しんだ。ダイナミックかつ繊細な数々の作品の裏には、誰にも見せることができない深い孤独と悩みがあったのだ。

読み終えた本を重ね、新しい本のページをめくるごとに、僕が彼に抱いていた「栄光に満ちた偉人」の像は崩れ、その代わりに、弱さを抱えながらも音楽と向き合い続けた「苦悩に満ちた男」の姿が見えてきた。

あのチャイコフスキーも、自分の弱さに悩んでいた。もちろん、チャイコフスキーの悩みは僕の悩みと同じではない。でも、自分の弱さに悩んでいたことは同じかもしれない。読書を通してそれを知ったことで、心が少し軽くなった。弱さをもっていてもいい。いや、むしろ自分の弱さを知って悩み続けていたか

ら、それを源泉のようにしてあの奥深く美しい音楽を作り出せたのかもしれない。ならば僕にも、自分の弱さを知ることで得られるものがきっとあるに違いない。そんな手がかりをつかんだ気がした。

チャイコフスキーの最高傑作といわれている交響曲第6番には「悲愴」という題名がついている。彼自身の人生が悲しさと痛ましさに満ち溢れていたからこそ、彼はこの名曲を書けたに違いない。そう思うと、彼の生涯をモチーフにした「ピョートルの悲劇」の中にあるメロディーやハーモニーが、彼の挫折や苦しみを表現しているように感じられた。その生涯の一場面一場面を思い浮かべながら、もしかしたら僕と同じように不安を抱え、自分の弱さに悩み、それでも命がけで音楽に向き合っていたのかもしれない想像した。すると、不思議とどのメロディーもハーモニーも自然と自分の心になじんで響くように思え、その音に導かれるように、つたないながらも演奏できるようになっていった。自分で見つけた手がかりが、確かに感じができる手ごたえに変わった。

コンクール県大会での「ピョートルの悲劇」の演奏で、吹奏楽部員としての夏は終わった。思い描き、心から願っていた結果には結びつかなかったけれど、仲間たちも、そして僕自身も、最高の演奏ができたと思った。

でも、僕が得た収穫はコンクールの結果だけではない。偉大な作曲家の中にも人間らしい弱さがあると知ったこと、自分自身の弱さを受け入れ、それを自分の力に変えられるようになったこと。そしてかけがえのない仲間との演奏でその力を実感できたこと。それらすべてが、この夏の命がけのチャレンジの大きな収穫だ。この収穫の手ごたえは、もっと大きなチャレンジに生かせるよう一生忘れずにいようと思う。